

1. はじめに

公共職業訓練施設においても企業においても諸分野でいろいろな向上訓練コースが開設されるようになった。

これらの向上訓練コースは主に地域社会の要請にもとづいて設定される。それがゆえに地域社会の要請が変化すればその向上訓練コースは不必要になる場合もある。少なくとも、ある向上訓練コースを開設すれば永遠に継続できるという性格のものではない。

ゆえに、既定の向上訓練コースの目標が地域社会の期待とズレていないか、その訓練方法が対象者に適合しているかを恒常的に評価しながら訓練を実施し、必要があれば訓練目標や方法を修正していかなければならない。いわば、向上訓練コースは一種の命をもつシステムと考えられる。

このような事情から向上訓練担当者は意図的、無意図的に訓練コースの中味を日頃の訓練を通して修正している。

しかしながら、既に設定した向上訓練コースをどのような視点からどのような方法で見直したらよいか、かならずしも十分な検討はされていない。

これらの課題は一般的に言えば、プログラム・エバリエーション、カリキュラム評価、教育プログラム評価の分野に属するものであろう。¹⁾²⁾しかしながら、本研究ではこのような研究分野の手段にこだわらず、公共職業訓練施設における向上訓練をとりあげ、現に実施されているコースをどのように見直せばよいのか、を極めて実務的なレベルで検討する。³⁾

ここで検討する訓練コースは公共向上訓練らしいものとして、われわれが設定した“半自動溶接技能クリニック”である。このコースに関する先報において、戸田、神田は「この向上訓練コースは完成したものではなく、実践をおこないながら修正していくものである。」と述べているがこの研究はその修正の営みともいえる。⁴⁾

本研究では向上訓練コースの改善のための情報を次のような視点より収集する。

第一に、“半自動溶接クリニック”においてあらかじめ設定した訓練目標が地域の人々の期待とズレていないかを確認する。

具体的には、次の二点を調べる。

① この向上訓練コースの受講者が職場にもどって、この訓練コースを受けたことを“よかった”と感じているか。もし、喜んでいるとすれば、どんな意味で喜んでいるのか。⁵⁾

② この受講者の所属する企業の上司、あるいは企業主はこの訓練コースを受けさせたことをどのように思っているか。受講後、職場での向上訓練の受講者にどのような変化がみられるか。

第二に、この訓練コースの訓練方法をどのように修正したらよいか、その改善点をみいだすことである。

この点を明らかにするために、次の手順をとる。

① 企業に受講者を尋ね、この訓練コースを受けての感想を聞き、印象に残ったこと、改善した方がよいことを質問した。

② この訓練コースの授業を共同研究者が観察することにより、訓練方法上の無理はないか、受講者が学習上困難を感じている点はないかを探った。⁶⁾

研究方法は次のごとくである。

“半自動溶接技能クリニック”は昭和61年2月から9月の間に3回実施された。この間の受講者は13名である。(2月コース、5名、5月コース4名<1名病欠>、9月コース、4名<1名病欠、次回に受講>)。その9例の受講者、およびその受講者を送り出している企業主、職場の上司を企業に訪問し、面談した。

調査時期は昭和61年10月である。

面談は訓練コース担当の神田茂雄と共同研究者の戸田勝也がおこなった。

この企業訪問調査は上記の目的以外にこの訓練コースの意義を地域企業の人々に正確に知ってもらう、いわゆる広報活動をも兼ねている。

面談時間はそれぞれ、30分から1時間の間であったが、テープに収録し、ありのままの声を生かすように整理した。⁷⁾

また、この訓練コースの授業観察は2月コースを心理学専攻の戸田勝也が担当し、5月コースを教育学専攻の下山敏一が担当した。